

ち ば たね ひさ  
千 葉 胤 久

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第71号

学位授与年月日 平成11年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)  
哲学専攻

学位論文題目 フッサールにおける「超越論的他者」の問題

論文審査委員 (主査)  
教授 野家 啓一 教授 柏原 啓一  
教授 清水 哲郎  
教授 篠 憲二

## 論文内容の要旨

### 序論

本文の課題は「超越論的他者」へと通じる道を辿り直していくことにある。ただ、この道は誤った方向へと進んでしまいがちな迷いやすい道でもある。フッサール自身が道に迷っていると言ってもよい。フッサールが自我論的還元を経由して至りついた先は、共に構成する「超越論的他者」ではなく、「自我の変様態」として「構成されたもの」であるにすぎなかった。

フッサールのように「還元」を「自我への還元」と見なすことに、すでに問題を指摘することができる。第Ⅰ部では、「自我への還元」というフッサールの「還元」理解には修正が必要であることが、反省論的観点と(他我)構成論的観点という二つの観点から論じられる。前者の観点からは「現象野」ということが、そして後者の観点からは「共に構成する者へ」ということがわれわれの採るべき方向であることが明らかになる。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部第2章で確認された方向の指示にしたがって、事物構成、空間構成、時間構成といった具体的な場面に分け入っていくことになる。そして、それぞれの場面において

「共に構成する者」としての「超越論的他者」がいかなる姿をとって立ちあらわれてくるのかということが考察の焦点となる。

だが、実のところ、こうした「超越論的他者」がそもそも存在するかどうか定かではないのである。と言うのも、第Ⅰ部において言及される「現象野へ」という方向を徹底し、「非主観性の現象学」の立場を堅持するならば、主観的なものには超越論性が認められないからである。超越論的なものが「唯一のもの」であるとするならば、超越論的「自我」も超越論的「他者」も存在しないと解釈しうる可能性があるからである。第Ⅲ部では、こうした、「非主観性の現象学」や超越論的なものの「唯一性」と「複数性」に関する議論を考慮に入れながら、もし超越論的他者がありうるとすれば、それはいかなるものとしてであるのか、ということが考察される。この考察が第三部のひとつの中心となる。

## 第Ⅰ部 「自我への還元」の問題点

### 第1章 「自我への還元」の問題点(1)——反省論的観点から

超越論的現象学においては、超越論的自我すなわち「超越構成を遂行する自我」をいかに反省しうるのかという「現象学的反省の可能性」が問題になる。より詳しく言えば、「反省を遂行する自我」と「反省される自我」との同一性がいかにして成立するのか、ということが問われなければならないのである。

フッサールは、この二つの自我の同一性がより高次の反省による「後からの確認」によって成立すると考えた。だが、反省の構造を反省する「徹底した反省」によって、反省においてはその反省を遂行している自我それ自身は反省されないという、反省のアポリアが明らかになる。究極的に反省を遂行する自我は、反省によって対象化されない、絶対的に匿名的なものなのである。このことから帰結するのは、高次の反省という「後からの確認」によって形成される自我の同一性は、「反省された自我」同士の同一性であるにすぎず、「反省を遂行する自我」と「反省された自我」との同一性ではないということである。この同一性は、決して「後から」成立するわけではなく、反省を遂行している際にすでに成立しているのでなければならない。このすでに成立している自我の同一性、つまり遂行態における自我の同一性がいかに成立しているのかということが問われるべき問題であることになる。このことを問うためには、「究極的に反省を遂行する自我」を何らかの仕方で「捉える」ことが必要となる。

反省の限界に直面しているわれわれには、「究極的に反省を遂行する自我」とその同一性を単純に反省によって確認する可能性は閉ざされている。ここでわれわれが行いうる作業は「反省の可能性の条件を問う」ことである。「究極的反省を遂行する自我」もそれが「反省を遂行する自我」である限り、「反省の可能性の条件」を満たしているはずである。反省の可能性の

条件を遡って問うという作業によって、「流れつつ立ち止まること」という両義的事態がその条件として見出される。この「流れつつ立ち止まること」は「究極的に反省を遂行する自我」においても成立していると言わなければならない。「究極的に反省を遂行する自我」を何らかの仕方で「捉える」とは、反省の可能性の条件を問うという仕方でそれを「流れつつ立ち止まること」として「捉える」ことであつたのである。

しかし、この反省の可能性の条件を問うという仕方であつても、やはり「究極的に反省を遂行する自我」の「生動性」は捉えられない。ここにおいて現象学は、「反省哲学・自我論的現象学」から「現出論的現象学・非主観性の現象学」へと変貌を遂げねばならないのである。反省・還元ということが「自我への反省・還元」ではなく、「現象野への反省・還元」として捉え直されることによって、「究極的に遂行する自我の生動性」のアポリアは解消されることになる。「究極的に遂行する自我は反省できない」という事態は現象学の自己変貌を促し、「還元」を「自我への還元」としてではなく、「現象野への還元」として理解すべきことを告げているのである。

## 第2章 「自我への還元」の問題点(2)——（他我）構成論的観点から

フッサール現象学における「他者構成」のひとつの意味として、「世界内部的存在者としての他者の構成」ということが挙げられる。だが、もちろんフッサールにおいて「他者の構成分析」はこのような意味で行われただけではない。周知のように、彼は現象学に対してかけられた「独我論」の嫌疑を晴らすためにも、「他者の構成分析」に取り組んだのであつた。独我論であるとする批判を斥けるためには、他者たちもまた超越論的自我であることを、超越論的現象学の理論構制に即して明らかなかたちで証示しなければならない。「超越論的他我の構成」という意味での「他我構成」の志向的分析は、同時に、「われわれすべてにとって共通の世界」つまり「客観的世界」の構成の問題に答えることも意図したものであつた。「世界内の存在者としての他者の構成」と「超越論的他者の構成」という二つの「他我構成」の問題は、互いに構成次元を異にするものであることに注意する必要がある。

フッサールは、まず他我へと向かう志向性を方法的に捨象することで、自己固有圏域を獲得し、次にそこから出発して、いかにして「他我」が構成されるのかを問う。フッサールにおいて「他我構成」は、対化連合による身体意味の移し入れをその基礎としてもつ「自己の自我意味」の移し入れという「自己移入」と、「ここ—そこの区別」の認識として「自—他の区別」の認識とが一体化したものであるとして考えられている。この一体化を担っているのが「もし私がそこにいるとするならば・あたかも私がそこにいるかのように」という表現であり、この表現で言い表そうとした一種の準現在化を軸にして得られる他我理解のあり方が、他我の「付帯現前化」である。「自己の自我意味」を移入されたものとして、他我は「自己の変様態」であるこ

とになる。

こうしたフッサールの「他我構成論」に対しては、そこで語られているのは「私の構成するはたらき」だけであって、独我論という批判への反駁のために必要な「他者の構成するはたらき」が語られていないという欠点を指摘できる。語られるべきであったのは、「私の構成するはたらき」のうちに、「他者の構成するはたらき」が含蓄されているということであり、そのことがいかに私に意識されているのかということであったのである。このような、自他の構成機能の志向的含蓄ないしは自他の共構成という事態が証示されるべき事態であったのであり、この点に、構成論的観点から見ても「自我への還元」という還元理解が不当であることの理由を見出すことができる。「還元」は「自我への還元」ではなく、「自他の共働態への還元」と見なされるべきものであったのである。

## 第Ⅱ部 「共に構成する者としての他者」に関する具体的考察

### 第1章 ノエマ・現実・他者

この章では、まずD・フェレスダールの解釈とA・ゲールヴィッチの解釈という、二つの代表的なノエマ解釈を検討し、それらの対立点を明らかにする。次に、そうしたノエマ解釈の対立の解消を目指しているR・ベルネの見解を参照しながら、両解釈において「ノエマと現実の対象」の関係がどのように異なるのかを確認する。この確認を通して、どちらの解釈にも、「現実の対象」に関する議論に不備が見られることが指摘される。そして、この両解釈の残した問題点に関して、フッサール自身の主張を考慮に入れつつ、考察が加えられていく。こうした考察の結果、「現実の対象」のうちに地平的な「汲み尽くせなさ」という特徴が見出されることになる。そして、この「汲み尽くせなさ」ということを具体的に検討していくことによって、「汲み尽くせなさ」のうちに「他者の地平」が見出されることが明らかにされる。

### 第2章 事物知覚における「付帯現前化」に見られる「他者」の契機

この章では、事物知覚の場面において「共に構成する者」として機能している「他者」がいかなるかたちで「私」に意識されているのかということが考察される。この考察にあたって、われわれが注目するのは事物知覚における「付帯現前化」と呼ばれる現象である。事物知覚も事物構成というひとつの構成である限り、そこにも他者の共構成的な機能が見て取られうるものでなければならない。この「他者の共構成的な機能」が「私」において「事物知覚における付帯現前化」として意識されているということがこの章では論証される。

『デカルト的省察』におけるフッサールにおいては、事物知覚に関わる「感性的自然」は自己固有なものと見なされているので、そこに「他者」の契機が見て取られる可能性ははじめから排除されてしまっている。だが、これは「超越論的主観性はつねに超越論的相互主観性であ

る」とする『危機』の見解とは相容れない。「感性的自然」のうちに「非自己固有な面」が見て取られねばならないのである。では、その「非自己固有な面」とは何か。これを、われわれは事物知覚における「非本来的現出」と呼ばれる側面に見て取ることができると考ええる。「非本来的現出」は、事物知覚における「非自己固有な側面」として捉え返されるべきなのである。

その理由は「ここ—そこ」という関係のうちにある。自己固有な圏域において「私」が位置するのは「いま・ここ」であり、それ以外の可能性はない。「いまそこから」の知覚という意味をもつ「事物の裏面の付帯現前化・非本来的現出」は自己固有的であるとは言えないということになる。それが「知覚」の一契機であるということを堅持するならば、それは「他者の(する)知覚」であるというほかはない。ここに、「他者が構成する」ということが「私が構成する」ということのうち含蓄されていること的具体例を見ることができる。「他者が構成する」ということは「私」において「事物の裏面の付帯現前化」というかたちで非主観的に意識されているということができる。

### 第3章 空間・他者・時間

フッサールにおいて、空間構成の分析は、まず非均質的な自己固有空間の構成分析からはじめられ、次いでそうした非均質的な空間から均質的な客観的空間がいかにか構成されてくるのかが問われるという仕方で行われる。均質的な客観的空間の構成に関しては「他者によって媒介された空間」であることが指摘されることがある。だが、自己固有な空間と見なされていた非均質的な空間もすでに「他者に媒介された空間」であると言える。このことを論ずるのがこの章の目的である。

非均質的な空間は、「方位付けの零点」としての「絶対的ここ」に位置する身体的な「私」を中心として分節化された空間である。この非均質的な空間が構成されるためには、この「絶対的ここ(の「私」)」が動くことのできるということが必要とされる。つまり、「私(の身体)」はつねに「ここ」にいるのだとしても、その「ここ」が動くということが前提となっているのである。そして、「ここ」が動くということは、「ここ」が「別なここ」になるという変化可能性ないしは「ここ」と「別なここ」の区別可能性を前提として含んでいるということができる。このように変化しうるということ、区別しうるということは、そこに「時間」が介在していることを意味する。空間構成には時間構成が先行しているのである。時間化における自己複数化・自己差異化が空間構成の根拠なのであり、より詳しく言えば、「生き生きした現在」の「流れること」の契機が「絶対的ここ」の自己複数化の根拠なのであり、「立ち止まり性」が「絶対的ここ」の同一化の根拠なのである。

この時間化に関して、フッサールは時間化を自我の自己複数化・自己差異化と見なし、自我の自己複数化によって他者の問題や人称化の問題を解決しようとするが、このように仕方解

決を図ってもそれは失敗に終わってしまう。それゆえ、時間化ということをフッサールとは別な仕方では捉え直すことが必要であり、この捉え直しによって時間化そのものの次元に共機能的他者の同時性が見て取られることになる。こうした時間化の捉え直しの必要性を考慮に入れるとき、「ここ」と「別のここ」との関係に関しても、そこに「他者」が介在していると考えべきであるということが明らかになる。「別のここ」から「そこ」が「ここ」の変様態として構成されるのではなく、「そこ」から「別のここ」が「構成される」のであり、「別のここ」は「そこ」の変様態なのである。

「別のここ」が「そこ」の変様態と見なされるべきであるとしても、「別のここ」と「そこ」との間にはやはり相違が見られると言わねばならない。「別のここ」と「そこ」、「別の私」と「他者」、「別な表」と「裏」…、こうした一対のもの前項と後項との間に見られる相違としては、前項は「非本来的」であれ共現前的であれ、あくまで「現前」的であるのに対して、後項は「非現前」的であるということが挙げられる。ここから、「別の私」とは区別される意味での「他者」とその「他者の他者性」を「非現前性」として捉えることが必要であると言えるようになる。

「現前と非現前」の構造を軸に時間化ということを捉え直すこともできる。このとき、時間化は非現前から現前へという動向と現前から非現前へという動向という二つの動きとして捉え直されることになる。このような捉え直しの作業によって、フッサールの「時間化」理解が、現前から非現前へという一つの動きにのみ限定されているものであるということが見て取れるようになる。そして、フッサールが見逃した「非現前から現前へ」という動向に「他者」との接点が見られるということが出来る。

#### 第4章 時間と他者

「時間と他者」という問題を論ずる場合、「未来」を主題として取り上げる必要がある。そこでこの章では、フッサールによって「未来意識」として位置づけられる「予期」を取り上げ、彼による「予期」の分析の検討から出発して、「時間化と他者」という問題次元にまで議論を展開していくことにする。

フッサールにおいて、予期は過去の想起に基づくものであり、想起を原型としていると見なされるが、このような考え方の不十分さがまず指摘される。そして、そこでは、予期が想起を原型とする「前方へ折り返された想起」であるとしても、「前方に折り返す」ためには「未来の意味」が同時に所持されていなければならないということが指摘されることになる。

次に、多義的なフッサールの「未来予持」概念を整理することを通じて、「滑り来るにまかせること」によって「到来すること」を意識することという意味での「未来予持」が取り出され、この意味での「未来予持」が「未来の意味を所持する仕方」であることが、そして「到来

すること」が「未来の意味」であることが指摘される。「到来すること」は「生き生きした現在」における「流れること」のひとつの契機であり、それ自体を自我は左右することはできない。自我はそれをどうすることもできずに、ただ「甘んじて受け入れる」ほかはない。したがって、「未来の意味を所持する仕方」としての未来予持は「甘んじて受け入れること」として理解されるべきであって、未来予持が「到来すること」の動因なのではないと言わなければならない。

「到来すること」が未来の意味として見出さされてきたわけであるが、この到来性をK・ヘルトは他者の「匿名的な共現在の時間形式」と見なす。到来性とは、「つねに新しくあること」として「なじみのないこと（異他性）」と「なじみのあること（自己固有性）」とが共発生している事態であると言えるからである。こうした理解に対しては、過去性にも異他性が見出されるのではないかという疑問はあるにせよ、異他性が自己固有性を可能にするという面を指摘しているものとして基本的には肯定しうるものであると考える。そして、このような理解にしたがえば、自己固有なものは確固としたものとしてはじめから存在するわけではなく、異他的なものとの出会い、それを甘受することにおいてはじめて成立するのであり、そのようにして成立するものとして絶えず「更新」されていかなければならないものとして把握されることになる。自己固有なものが絶えず更新されていくことにおいて、自己差異化・自己複数化が遂行されるのであり、こうして「別の自己」「別の私」が成立することになる。したがって、「別の私」における「別の」という意味は、「更新」に由来するのであり、さらに溯れば「更新」を促す「流れること」という異他性に由来するものなのである。

### 第三部 超越論的自我の唯一性と他者

#### 第1章 超越論的自我の唯一性と複数性

フッサールにおいて、超越論的自我は一方では「他の超越論的自我」という言葉に表れているように「複数」である。だが、他方では「唯一の絶対的自我」でもある。「唯一」であるということと「複数」であるということとは規定として相容れるのであろうか。この、「唯一性」と「複数性」の矛盾はどのようにしたら解消されるのであろうか。「複数である」ということの意味と「唯一である」ということの意味の検討を交えて、この問題に答えていくことにする。

複数の超越論的自我、他の超越論的自我ということが語られるのは、自他の「志向的含蓄」という関係が論じられる場合である。この「志向的含蓄」の議論において問題とされる超越論的自我は、いわば誰でもよいものであることが『危機』のフッサールの言葉から確認できる。「志向的含蓄」は任意の超越論的自我同士の関係として想定されているのである。

では、「唯一の超越論的自我」という場合はどうであろうか。「絶対的エゴ」は構成するもの

であるがゆえに、被構成態として「我と汝の区別」があてはまる人間主観性とは区別される。それは「唯一性と人称的不変性」とを決して失わない「究極的に機能する絶対的に唯一の自我」なのである。『危機』においては、このように「絶対的に唯一」とされる「究極的に機能する自我」もまた、誰もが反省によって自らがそのような自我であると自覚しうるものと見なされている。

唯一性と複数性の矛盾を解消しようとする解釈にはいくつかの形態が見られるが、われわれが基本的に肯定せねばならない解釈として以下のものが挙げられる。それは、唯一の「自我」と呼ばれてきたものに対して「私」「自我」という名称を与えることを拒否し、「唯一」のものは「自我」ではなく「現象野」「超越論的領野」と見なすことによって、超越論的次元における自他の問題は疑似問題であるということになる。つまり、自他の問題は世界内部的な次元での問題に限定され、超越論的な場面では「自他未分の唯一の領野」が認められるのみであって、自他の区別を前提とした「共に構成する者としての他者」という議論はそもそも不要なものであるということになる。

「唯一」と形容されるべき「究極的作動そのもの」は、「私」でも「他者」でもないし、各自が個々別々にもつものでもない。それは「誰もがそれでありうるところのもの」「誰であってもよいもの」なのではなく、むしろそれは絶対的に匿名的なものとして「誰かがそれであると言ってはならないもの」なのであり、「誰かであってはならないもの」なのである。換言すれば、それは「誰もがそれに関与しているところのこと」、「誰もがそれを受け入れている・甘受しているところのこと」と表現されるべき「こと」なのである。

## 第2章 超越論的存在者の可能性

前章において肯定的に取り上げられた解釈において、問わずに残されている問題として、「構成に関与する自我」をどのように捉えるべきであるかという問題を取り上げて考察する。この考察の目的は、ある意味では「存在者」にも超越論性を認めることができるのではないかとすることを主張することにある。

はじめに、この点に関する議論として、いわゆる「ブリタニカ草稿」をめぐるなされた、ハイデガーによるフッサール批判を参照し、この批判を行った当時のハイデガーの「現存在」概念を「改釈」することを通じて、「パースペクティヴの原点としての私・他者」がわれわれの求める「超越論的存在者」であるという示唆が得られることになる。

次に、この「パースペクティヴの原点としての私・他者」を本質的に「超越論的存在者」として認めるべき理由が考察される。その理由として、「パースペクティヴの原点としての私・他者」は何か「超越論的領野」に現象するというとき、その現象すること・現出することによって本質的に必要な契機となっているということが挙げられる。もし仮に現れるものが「私」



に対して現れるということがないとしたならば、それは現れるものではなく、実体と言われるものであるということになってしまうからである。何ものかの現象が現象であるためには「私」に対して「現れる」ということを欠くことはできない。この意味で、「パースペクティブの原点としての私・他者」は超越論的な次元に不可欠の存在者であると言えるのである。

### 第3章 エポケーを遂行する「私」の「唯一性」

この章では、エポケーを遂行する「私」に対しては「私の唯一性」ということが意味をもちうるということが論じられる。

『危機』での「私 (ich)」という言葉の用法を再確認してみると、フッサールは「エポケーにおいて発見される自我」である「超越論的自我」に関しては、それを「私」と呼ぶことを躊躇している場面があるのに対し、「エポケーを遂行する自我」である現象学的観視者に関しては、それは「私」と呼ばれてしかるべきものであると見なしていることが確認できる。単なる世界内部的存在者とは別に、もうひとつの「私」として「エポケーを遂行する自我」を挙げるのであり得るのである。

また、『危機』の再検討から、「絶対的に唯一の自我」は「超越論的自我」に対して使用される術語であると同時に、「エポケーを遂行する自我」に関しても使用される術語であるということも確認できる。E・フィンクは「エポケーを遂行する自我」と「超越論的自我」との間に差異が認められることを指摘しているが、この指摘にしたがうならば、「超越論的自我」と呼ばれてきたものの「唯一性」とは異なる意味で、「エポケーを遂行する自我」の「唯一性」が指摘できるように思われる。「エポケーを遂行する自我」の特異性はそれが「世界構成に関与しない」ということにある。この点で、「エポケーを遂行する自我」は、超越を構成することそれ自体である「超越論的領野」とも「構成に関与する超越論的存在者」とも区別されねばならない。

こうして、「エポケーを遂行する自我」が「私」であるとともに「唯一性」を指摘しうるものであること、つまり「私の唯一性」という意味をもちうるものであることが見出されてくる。そして、この「エポケーを遂行する私の唯一性」の意味内容が、「エポケーを遂行する自我」の「観視する」はたらきによってそれが、「世界内部的存在者としての私」からも「超越論的自我としての私」からも距離をとって、つねに「もう一段こちら側」に位置しているということのうちに現れて取られることになる。

### 結語

自他の共構成ないしは共機能的事態を具体的に把握するというのがこの論文のひとつの目的であったが、その考察の過程において、「現前と非現前の構造」ということを軸に「自他の

共構成」という事態を捉え返すことが必要であることが明らかになってきた。しかし、この論文では、こうした考察すべき主題の変化に機敏に即応した議論を展開することはできなかった。「現前と非現前の構造」をより具体的な場面において考察していくことによって、自我の問題と他者の問題が捉え直されるべき方向をより明確なかたちで提示しうる議論を展開していくことが今後の課題である。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、フッサール現象学が抱え込んだ最大のアポリアとも言うべき「超越論的他者」の問題を、近年の「現出論的現象学」ないしは「非主観性の現象学」と呼ばれる研究動向を踏まえながら、他者を「共に構成する者」として捉え直すことを通じて解明しようとし試みたものである。全体は「序論」、第Ⅰ部「『自我への還元』の問題点」全2章、第Ⅱ部「『共に構成する者としての他者』に関する具体的考察」全4章、第Ⅲ部「超越論的自我の唯一性と他者」全3章、および「結語」からなる。

「序文」においては、フッサールが切り開いた自我論的還元を經由して「超越論的他者」へ至るといふ道が、結局は自我によって構成された「自我の変容態」にすぎなかったことが指摘され、続いて本論文全体の構成について簡略な展望が示される。

第Ⅰ部「『自我への還元』の問題点」においては、「究極的に反省を遂行する自我を反省することはできない」という現象学にまつわる反省のアポリアが主題として取り出され、その考察を通じてフッサール現象学の自我論的問題設定の限界が明らかにされる。論者はまずフッサールが立てた「人間としての自我」と「自然的態度における自我」の区別を検討し、現象学的還元による後者の対象化こそが「遂行-自我」の対象化であることを確認する。その上で、フッサールが提起した「高次の反省」が反省を遂行する自我と反省される自我との同一性を保証することはできず、その困難が最終的には彼自身が依拠した自我論的構図に由来することが解明される。フッサールの「他我構成論」が自己移入を介した「自我の変容態」をしか構成できなかったのも、同じ理由に基づくのである。そこから論者は、K.ヘルトの「生き生きした現在」の分析を参照しながら、「遂行-自我」の生動性を捉えるためには自我論的現象学から現出論的現象学ないしは非主観性の現象学への方向転換が必要であることを主張する。そのことは「還元」の手続きそのものを「自我への還元」ではなく「現象野への還元」として理解し直すことを意味する。それに依拠しつつ論者が提起するのは、自我の構成する働きのうちに他者の構成する働きが志向的に含蓄されるという根源的な事態である。それゆえ「還元」は「自他の

共働態への還元」として捉え直さなければならない。以上の議論は、先行研究を踏まえながら現象学の理論的困難を明確に取り出し、その隘路を切り開く方向を示唆した点で評価することができる。

第Ⅱ部「『共に構成する者としての他者』に関する具体的考察」では、第Ⅰ部で得られた知見を具体的な場面で論証し敷衍するために、「ノエマ」や「付帶的現前化」等現象学上の問題概念に即した分析が試みられる。論者はまずノエマ解釈をめぐるフェレスダールとグールヴィッチの対立を取り上げ、いずれの解釈においてもノエマと「現実の対象」との関係に問題が残ることを指摘し、そこから現実の対象の「汲み尽くせなさ」という地平的性格を浮き彫りにする。この性格の中にこそ、「他者の地平」が垣間見られるのである。そのことは、さらに物事知覚における「付帶的現前化」の現象において確認される。「いま・ここ」という自己固有領域に現出しない事物の裏面は、にもかかわらず知覚の不可欠の契機をなしている。論者はこの付帶的現前化、つまり「いま・そこ」からの知覚を「他者の知覚」と解釈する。言い換えれば、「他者の共構成的な機能」は、事物知覚における裏面の付帶的現前化という形で非主題的に意識されているのである。この「現前と非現前」の共役的構造を、論者はさらに空間構成および到来性としての未来という問題次元に即して考察し、議論を深化させる。以上の論述は、荒削りな面が散見されるものの、事象そのものに向き合いながら独自の分析を展開したものであり、論者の現象学研究者としての確かな資質を示すものと言える。

第Ⅲ部「超越論的自我の唯一性と他者」においては、本来「唯一」であるべき超越論的自我が、「他の超越論的自我」を認めることによって「複数性」を帯びるというフッサール現象学に内在する根本的矛盾の解決が目指される。論者は従来の諸解釈を検討しながら、「唯一」であるのは「自我」ではなく、「現象野」あるいは「超越論的領野」と呼ばれるものであることを確認する。いわゆる自他の区別が成立するのは世界内部的次元においてであり、超越論的次元では「自他未分の唯一の領野」が認められるのみである。したがって、超越論的次元における「唯一にして複数」という矛盾は見かけ上の矛盾にすぎず、一種の疑似問題にほかならない。「唯一」と形容される「究極的作動そのもの」は、「私」でも「他者」でもなく、絶対的に匿名的なものとして「誰もがそれを受け入れ、甘受していること」なのである。その上で論者はさらに、「存在者」に超越論性を認めうるか否かという問題を、ハイデガーのフッサール批判を手がかりにして考察する。論者によれば、ハイデガーの「現存在」概念に示唆されている「パースペクティヴの原点としての私・他者」こそが、「超越論的存在者」の名に値するものなのである。続く第3章では、「エポケーを遂行する私」の位置が、「世界内部的存在者としての私」とも「超越論的自我としての私」とも異なる「もう一段こちら側」にあるものとして特徴づけられる。最後に論者は「結語」において、もう一度全体の論旨を振り返り、「現前と非現前の

構造」をより具体的な場面で考察することを今後の課題として論を締め括る。第Ⅲ部は全体として超越論的自我にまつわるアポリアをよく整理し、説得的な論議を展開しているものの、第3章のみは異質の主題を扱っており、「付論」として別個の位置づけを与えるべきであったと思われる。

本論文は、遺稿を含む後期フッサールのテキストの丹念な読解に基づいて、彼の自我論的現象学が逢着した困難を明確な形で取り出し、それを克服する方途を「現出論」への転回に求めた点において、現象学の新たな可能性を示唆するものとなっている。もちろん、取り組んだ問題の大きさに応じて、論じ残された事柄も多いことは論者自身が認めているところである。しかし、論述の明晰さと細部をゆるがせにしない議論の展開とは本論文の優れた特質であり、これが現象学研究の学問的発展に寄与するものであることは疑いをいれない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。